

8月7日(火)～16日(木)
表敬訪問



「一番スリランカで感じたことは、人の優しさだった。知り合ってから数日の自分を家族として迎え入れてくれる温かさが嬉しかった。また意識が変わった。自分がそこに居ることに何か意味があるのではないかと思えるようになった。」
今別府 幸芽



「発展途上国のイメージが変わった。皆楽しそうで、優しく、日本から来た自分を受け入れてくれた。最初は孤独を感じたが、スリランカの人々は、たくさん話しかけてくれた。人間はどんな国でも皆同じだと思った。自分の夢を見直す機会になった。」
栄村 菜里香

8月19日(日)
報告会



「この研修がとても良い経験になった。自分だけではできないことがたくさんあるということや、どれだけ今まで支えられているかということも実感した。何がしたいか目標が変わった。今出来ることをしっかりと考え実行したい。」
小宮 那々花

団員が感じたこと

スリランカで見たこと

純心女子高等学校 3年

池亀 美羽

まず、私が衝撃を受けた事実がある。それは、スリランカは自殺率世界第一位だということだ。この話をしてくれたのは、コロンボにあるデヒオウイタ保健所で、青年海外協力隊員として、保健師をしている長部千寿さんだった。外国人の私たちにも笑顔で話しかけてくれて心から歓迎してくれて、優しい人たちなのになぜ？というのがこの言葉を聞いた瞬間の私の思いだった。失恋で自殺をしてしまう人もいるらしい。私たちはその事実には戸惑いを隠せずにいる。

スリランカは、上座部仏教として有名な通り、袈裟を着たお坊さんを至るところで目にする。人々はお坊さんが通ると道を開け、ひざまずいて崇拜する。テレビのドキュメンタリー映像で見ていた光景がいざ目の前で起こると完全に委縮してしまった。家では子供たちが毎朝、庭から生花を摘んできて、仏壇に供える。日本で仏壇に向かってお祈りするのは、先祖に向かってするが、スリランカでは先祖というよりむしろ仏陀に礼拝している。仏教の五戒を厳守するため、スリランカの人々は誰にでも優しく、嘘をつかない。そのことがよくわかるのが、介護、保育分野である。

スリランカの一部の都市では保育所が普及しつつあるそうだが、ほとんどの家庭は小学校に入るまでは自宅で面倒を見る。高齢者も同じだ。最期まで世話をすることがスリランカ流の家族に対する優しさなのかもしれない、とコロンボからバスで1時間半ほどのところで、高齢者介護の分野で活動する女性隊員は言った。私自身、日本のように、施設に入れ、最期を迎えるより、スリランカのように家族で世話したほうが良いように感じたが、その介護福祉士として働く女性は、日本のように施設に預けることをスリランカでもすべきだと語った。この女性の言葉で最も印象に残ったのが次の言葉だ。「自宅で家族が世話をすることで、寝たきりになってしまう人も多い。もし、私たちのような資格をもつ人とその人が出会っていれば、今その人は元気に歩いているかもしれない。」この言

葉は私の考え方を変えた。作業療法士としてリハビリ職に就きたい私にとって、この言葉はこれから常に胸にある言葉になると思う。せっかく専門的な知識を持つ人が周りにいるのに、相談できる状況にいない人が世界に何人いるのだろうか。私たちが暮らす日本ではすぐ近くに病院があり、相談できるような人は周りにいる。この状況がどんなに恵まれているのか、身に染みて感じる言葉だった。

これからどのような作業療法士になりたいのか、明確なものがなかった私だが、この1週間ではっきりと将来像が見えた気がする。私は、寝たきりになってしまう人を一人でも減らしたい。そして、「もし専門家に相談できていたら、寝たきりにならなくてすんだのに。」という言葉がなくなる社会になるように、作業療法士として、世界に身近な医療を広めたい。そして、作業療法士としてスリランカに赴く機会がいつかあれば、自殺率1位という残酷な現状を変えるお手伝いがしたい。



青年海外協力隊（保健師）：長部 千寿 氏



コロンボにて 本人：右から2番目

団員が感じたこと

スリランカで学んだこと

鹿児島大学教育学部附属中学校3年

木下 耀太

今回私は、アジアの魅力を世界に発信したいという想いからぜひ東南アジアの国(実際は南アジア)に訪れ、アジアを語れるようになる1つのパーツとなれたいと思い、参加しました。また、外国の人に言語を習うことにとっても楽しさを感じ、私自身も言語を教える立場に立ってみたいと思い、青年海外協力隊も一つの方法だと思っていたことも参加の1つの動機でした。

派遣者にえらばれ、2回に事前研修を経て派遣がとても楽しみでなりません。そして、迎えた7月25日、色々な方からお言葉をいただきスリランカへ出発しました。10時に鹿児島を出て、新幹線で福岡まで行き、福岡空港から香港、そして現地時間の0時くらいに到着したスリランカの空気は生暖かく、若干飲食店のような香りがしました。特に、驚いたわけでもないですが、あの空気は鮮明に覚えています。そして、スリランカでの活動が始まりました。

JICA、青年海外協力隊活動現場、学校訪問、青年海外協力隊との夕食会などすべてが充実していましたが、私は、ホームステイに一番驚いて、大変で、楽しくて、かけがえのない経験になりました。私はホームステイがとても好きで、これまでも何度か受け入れてもらったり受け入れられてきましたが、今回が一番意味のあるものでした。ホームステイ中は驚くことだらけで、家に着いて、まずリビングにテレビ、いす、ミシン、仏壇しかなかったのに驚きました。部屋は布で区切り、ドアは玄関のみで、もちろんIHやガスなどはなく、薪で火をおこし、さらにシャワーは外についており環境がとても違い、馴染めるか不安でした。正直1日目は辛さを感じました。自分が恵まれていることを痛感しました。でも、ホストファミリーはいつも一生懸命にもてなしてくれて、とてもありがたかったです。

そして、スリランカの人は近所付き合いが盛んで、半径1km圏内の住民はみんな友達といっても過言ではないと思います。そのため、たくさんの友達が家に来てくれて、交流するのがとても楽しかったです。そし

て、日本への執着はなくなり、スリランカへの愛が大きくなっていきました。色々な活動をした後、家に帰るととても落ち着くようにもなりました。環境は辛くても、愛があるから幸せでした。ホストマザーの優しさはとても心に残るし、いつも気を遣ってくれました。夫が亡くなってシングルマザーとして二人の子供を支えるのはとても大変で辛い中、笑顔でもてなしてくれた母はすごい人でした。ホストブラザーは、すぐ名前を覚えてくれて、遊ぶのに誘ってくれたり、ふざけたりして楽しませてくれ、何より日本の文化を積極的に知ろうとしてくれて充実した国際交流が出来ました。全員がかけがえのない家族となり、別れが辛かったです。このホストファミリーに出会えて本当に幸せでした。そして、この家だったから成長できました。

私は、将来キャビンアテンダントになるのが夢で、世界中を飛び回り、再びスリランカを訪れたいと思います。そして、青年海外協力隊になるチャンスをつかみ、参加したいと思います。そのために、今向き合わなければならないことに真剣に向き合おうと思います。

そして、鹿児島市、協賛してくださった企業、スリランカで出会った方、先生、そして両親に心から感謝したいです。誠にありがとうございました。



ホストファミリー



ホストファミリーとお別れ会での食事を楽しむ様子

世界に通じる「おもてなし」の心

鹿児島大学教育学部附属中学校3年

永谷 玲葉奈

今回この体験事業に参加して、私はどの国でも共通している「おもてなしの心」というものを感じました。

東京で2020年にオリンピック・パラリンピックが開催されることが決定した時に流行した「おもてなし」という言葉をあなたは覚えていますか。これは昔から日本に伝わる「相手を気づかい、相手のために尽くす」という意味の言葉で、私のホストファミリーに日本のイメージを聞いてみた時も、自然に出てきた言葉でした。特に私がスリランカで「おもてなし」を感じたのは、ホストファミリーと一緒に過ごす中の出来事からでした。

毎朝ホストマザーが手渡してくれるとびきり甘いミルクティー、ルールを教えてもらいながら村のみんなと一緒にしたクリケット、集まりがあった後、必ずトゥクトゥクで迎えに来てくれるホストファミリー・・・

たくさんの人と触れ合う中で感じたやさしさは、日本に帰ってきた今でも心に強く焼き付いたままです。

私はこれまで、「おもてなし」というのは日本にしかない考え方だと思っていたのですが、今回スリランカに行き現地の人々のやさしさに触れたことによって、形は違っていても、それぞれの国にはちゃんと相手への思い、もてなす心があるのだということを知りました。

また、今回の事業に参加したことで、これまで不鮮明だった自分の将来のビジョンがはっきりとしたものになりました。派遣前、私は特に目指すものがなく、親に勧められていた医療の道を選択しようとしていました。しかし、今回世界中で利用されているコンピューターなどに関する職業の魅力を知り、もっとそのことについて学びたいと思いました。そのことから、今後の進路をはっきりさせることが出来ました。現在の私の夢は、コンピューターエンジニアとして、いつか青年海外協力隊の一員として海外に技術支援をしにいくことです。その為の勉強を高校で頑張ろうと思っています。

また、今自分が当たり前のことだと思っていること

が、場所や場合が違えば当たり前のことでなくなる、ということも学ぶことができました。蛇口をひねれば飲める水が出てくることや、温かいお湯が日常的に使えること、箸を使って食べ物を食べること、地面が茶色の土でおおわれていること、料理にだしを使うこと・・・あげていくと枚挙にいとまがないほどたくさんの違いがありました。自分にとっては新しいことでも、それを当たり前だと思いながら過ごしている人がいる、ということを改めて再認識することができたのも、今回の大きな収穫だったと思っています。

今回お世話になったホストファミリー、団員の皆さん、同行者の皆さん、応援してくれた家族、激励してくれた友人、先生方、その他たくさんの応援してくださった方々に改めて感謝の気持ちを伝えたいと思います。



ホストファミリーと一緒に 本人：右



ホストファミリーと一緒に 本人：左から2番目

団員が感じたこと

スリランカで私が感じたこと

鹿屋市立第一鹿屋中学校 1年

松山 和子

私は、スリランカを忘れない。そこで過ごした8日間は、私にとって特別なものになった。

鹿屋を発って16時間。スリランカに到着した。同級生のお母さんがスリランカ人であり、聞いた話を体験すべく応募したスリランカ研修だったが、4泊のホームステイは不安だらけだった。

バスは村に着いた。大きな看板が目飛び込んできた。私たちの写真が載った看板を見て、嬉しくなった。とても歓迎されている。そう思った。

スリランカは、農業が盛んな発展途上国だ。行くまでは、物が十分になく、人々はやせ細っていて…、と勝手に終戦直後の日本に重ねて想像していた。

実際に見たスリランカは、予想とは違うことがたくさんあった。食料も教育も充足していた。人々は親しみやすく、人懐っこい。家族を大切にする。家族団らん時間が多く、笑い声が絶えない。ご飯を薪で炊くなど不便なところもあるが、日本とは大違いな自然と共存しながらの生活は楽しかった。

ホストファミリーの愛情を強く感じる出来事があった。ホームステイ最後の夜。ホストファミリーは、別れを惜しみ泣いていた。ホストファザーが「ワコ。ジャパン、ナンギ、ランブータン、デナワ」と大声で語りかけながら部屋に入ってきた。これは、「和子。日本の妹にランブータンをあげるよ」という意味だ。私がランブータンを「ラサイ(美味しい)」と気に入って食べていたことを覚えてくれていたのだ。検疫のため帰ることはできないと伝え、ホストファザーは泣き始めた。私も泣きそうになった。ファザーの思いに触れ、ここにいたいという思いが胸の中にあふれた。

スリランカの初代大統領は、敗戦国として分断されようとしていた日本を「憎しみは憎しみを終わらせられない。憎しみは愛によって救われる」という言葉で救ってくれた。サンフランシスコ平和条約締結後、世界で一番早く日本と外交関係を結んだのも、スリランカだったそう。東日本大震災への支援や追悼を知る

と、スリランカの人々の愛情を改めて感じた。私は、これほど日本人を想い、行動してくれるスリランカのことを知らなかった。そのことを、今回の旅で痛感した。

この貴重な体験を通して、様々なことを学んだ。日本人から見たら不便な生活だが、スリランカの人々は、自分で工夫することを楽しんでいた。日本人は便利な生活をしているのに、不便なことがあると不満を口にする。自分では工夫せず誰かや社会のせいにする。日本の当たり前は、ほかの国では当たり前でないことを知った。ほかの国はどうなのかもっと知りたい、色々な角度からものを見ることができるとなりたいと思った。

これまで、自分の部屋に閉じこもっていることが多かった私が、帰国後は家族との時間を意識して持つようになった。特に、妹との会話を心掛けている。妹が「お姉ちゃんがやさしくなった」と言っていた。私の中の何かが少しずつ変わってきているのかもしれない。



ホストブラザーと一緒に 本人：中央



ホストファミリーと一緒に 本人：前列左

スリランカという異国の地で感じたこと

鹿屋市立輝北中学校 3年

丸山 健生

アーユーボーワン(こんにちは)。7月の25日から8月1日の一週間という日程で行われた今回の研修ですが、長いようで、行ってみるととても短いものでした。

今回の研修で僕は、とてもたくさんのことを学ぶことができました。その中でも、特に心に残っていることが二つあります。

一つ目は、言語の壁です。僕らは、スリランカに行く前にシンハラ語の練習や食事の練習として事前研修が二度ありました。その時に「指さし会話帳」というシンハラ語の本をいただきました。「この本があれば大丈夫だな」と自信過剰になっていた僕は、実際にホストファミリーにその本を見ながら鹿児島のことについて紹介しました。しかし、ホストファミリーは僕が何を言っているのか分かっていないようで、本に書いてある文字を見せてやっと理解してくれたようでした。言っていることが伝わらなかったという悲しさもありましたが、書いてある事をそのまま読んででも伝わらない、言語の壁、というものを強く感じました。同じ地球に住んでいる人間同士なのにコミュニケーションがうまく取れないということに、僕は、もどかしさを覚えました。今、僕は、中学校で英語を習っていますが、この経験により他の言語にも興味を持つようになり、将来、英語以外の他の言語も話せるようになりたい、と思うようになりました。

二つ目は、日本とスリランカの貧富の差です。事前研修の時に「日本だと百円で売られているリンゴがスリランカでは、六十円で売られている」とシンハラ語講師の先生に言われました。ホームステイ中、僕のホストファミリーが、英語で僕にこう言ってきました。「僕は、将来ソフトウェアエンジニアとして働きたい。そして日本で働きたい。でも、日本に行くお金が無い。」そう言われて、僕は、はっとしました。日本だと、高校や大学で高い就職率を売りにしている学校をよく目にします。しかし、スリランカでは、大学もごくわずかな人しか行けず、高校を出ても、就職率もそんな

に高くない、だから、僕が、日本へ就職するための架け橋となって、とホストブラザーは言ってきました。僕も、きっと今回の研修に参加していなかったら、ホストブラザーと出会ってなかったら、高校へ行き、そのまま就職という道を選んでいただいでしょう。今回、ホストブラザーと出会えたことで、いかに自分が恵まれているか、日本がどれだけ恵まれた国なのか、とてもよくわかりました。この経験を活かし、僕は、世界を視野に見ることができ会社で働きたい、と思うようになりました。

どんなホストファミリーだろう、生活に適應できるかな、など様々な不安と世界を見てみたい、という挑戦心で臨んだ今回の研修ですが、今思うと、本当に行ってよかったな、と心から思います。スリランカという異国の地でホームステイをしたという経験は、一生忘れない思い出となり、今後の僕の人生に大きく関わってくるでしょう。貴重な体験をさせてくれたホストファミリーをはじめ、この研修のことを教えてくれた家族、後押ししてくれた学校の先生方に改めて心から感謝したいです。ステューティー(ありがとう)。



ホストファミリーとのひととき



ホストブラザーと一緒に 本人：中央

日本とスリランカの違いと共通点

川辺高等学校 2年 栄村 茉里香

今回の事業に参加して多くのことを学びました。

まず、この事業に参加する前の私は発展途上国と聞くとやせ細った人が多く、食料も十分でない国ばかりだと思っていました。治安も悪く、怖い、貧しいなどマイナスなイメージしかありませんでした。しかし、今回訪問したスリランカはそんなイメージを覆す国でした。

スリランカを見て最初に驚いたことは、想像より建物が多く建てられており、道路は常に車でいっぱいだったことです。また、車は日本車も走っていたり、現地の人はスマートフォンを持っていたり、日本との共通点がいくつかあったため親近感が湧くこともありました。ですが、やはり整備が行き届いていない道路があったり、野良犬が歩道や道路にいたり、まだまだ不十分なところもありました。電車でドアがなく今にも押し出されそうだったり、車と車がぶつかりそうになったり、車が来ているのに人々が道路を横切ったりしていて、危険な場面を目にすることもありました。

JICAの事務所訪問や青年海外協力隊の視察に行きました。私は、青年海外協力隊は人を助けるだけのものだと思っていました。しかし、実際は動物園で働いていた、スポーツを教えていたりと知らなかった青年海外協力隊の活動を知ることができました。海外で自分の好きなこと、好きな仕事ができるということはとても立派だと思いました。自分のやりたいことで困っている誰かを助けられるのはとてもやりがいを感じます。日本で同じように働くことと海外で働くのでは、得るものが違うと思いました。日本は先進国なので、日本の技術や取り組みを海外に広げていくことも大事だと思いました。

また、保健師さんのところに行ったとき、ゴミをあちこちに捨てると聞いて驚きました。日本ではゴミ箱に捨てるのが当たり前ですが、国によっては普通ではないということもわかりました。日本の普通が海外では普通ではなく、一つの問題になっていることもあるのだと思いました。

最後に、私が最も印象に残っているのは現地の人たちやホームステイ先の人たちの心の温かさです。初め

て日本を出て言葉の通じない国に行きました。ホームステイ先では言葉がわからず、孤独を感じるときもありました。でも、人というものは不思議なものです。言葉がわからなくても優しく接してくれたり、一生懸命伝えようとしたりしてくれました。国は違えど人に対する心の優しさは変わらないものなのだと思います。ホームステイ先の人たちは私の本当の家族のように振舞ってくれました。トイレやお風呂は不便を感じることもありましたが、食事は美味しくて、ホームステイ先の子供たちは日本のことを興味深く聞いてきました。その何気ない言動が私にとってはとても心強く、心を許すようになりました。

同じ仏教でも信仰の強さが違ったり、手でご飯を食べたりなど、日本では経験できない体験もすることができました。日本にいと海外の文化などに偏見を持つこともありますが、実際、海外に行くと現地の人にとってはそれが当たり前で、自分がそれを体験するとその偏見もなくなり、過ごしていくうちに慣れてきました。このような経験を活かして、家族や友達に日本がどれほど贅沢で、当たり前で過ごしているかを伝えていこうと思います。



ホストファミリーと一緒に 本人：左から3番目



スリランカの街並み

スリランカ研修で学んだこと

川辺高等学校 3年 園田 玲音

今回の研修を通して、日本では知ることのできないことを実際に体験して学ぶことができた。その中でも一番印象に残っていることは青年海外協力隊の活動視察とホームステイである。

青年海外協力隊の活動視察では、日本と同じ職業でもその国で起きている問題によって仕事内容も異なり、その国の文化によって変わっているということを感じた。このように感じることはできたのは保健師の協力隊の活動を視察した際であった。その方の働いている保健所は、この方が来る前は、整理整頓がされておらず、注射したあとに貼るガーゼが床に落ちているなど保健所としての衛生管理がしっかりとされていなかったそうだ。それを聞き、私は日本では当たり前ということがほかの国では違うということを強く感じる事ができた。また、スリランカは生活習慣病が多いということを知り、なぜそうであるかということをもホームステイ先で感じる事ができた。スリランカ人は辛いもの、甘いものの両極端な味と油物をとても好む。だから、スリランカでは生活習慣病が多いのだと考える。

このように日本とスリランカでは抱えている問題が違う。今回の視察で保健師などの青年海外協力隊の方々のその国の問題に対する改善しようという気持ちが強く伝わり、言葉も文化も違う国でそのように働いている姿はかってよく、どの隊員もいい笑顔であった。私もこの方々のようにほかの人達のために日本とは違う国で働きたいという気持ちが今まで以上に強くなった。

ホームステイでは、言葉がわからない状態、日本とは異なる生活習慣の中で四日間も過ごすということは、自分にとってとても不安ばかりであった。しかし、実際はそうではなかった。ホームステイ先の村に着くと村の方々の温かい出迎えにとっても感動した。私たちのために村中の人々が来ており、現地の飲み物や食べ物でおもてなしをしてくださり、この時点でスリラン

カ人は優しく、笑顔の素敵な人達だと感じる事ができた。ホストファミリーと対面し、家に到着すると家族が家の外で待っていて、とても嬉しく、良いホストファミリーに出会ったと感じた。

ホームステイをしていて自分自身が伝えることができないというよりも、相手が私に対して何と言っているのかわからない時が一番辛かった。理解できれば会話がスムーズに流れていくが、それが出来ないことで日本では感じる事のない会話の難しさを体感した。シンハラ語では難しい際に英語を使ったが、その時、英語の大切さを改めて痛感できた。私が困っていてもホストシスターがいつも助けてくれ、伝えたいことをホストマザーに言ってくれたりした。ホストシスターは勉強熱心であり英語や日本語を積極的に学ぼうとしていて、まだ小学生だが、自分も頑張ろうという気持ちになった。

今回の研修を通して文化や青年海外協力隊についてだけではなく人との関わり方についても学ぶことができた。そして、将来の進路に向けての良い経験をすることができ、もっと世界について学びたいという気持ちが強くなった。



青年海外協力隊活動視察の様子



ホストシスターと一緒に 本人：左上

スリランカでの一週を終えて

龍桜高等学校 2年 板元 麗

私は、スリランカでの国際協力体験事業に参加し、たくさんのことを体験しました。

私が、スリランカでのホームステイを通して、何が一番、印象的だったかというと、ホストファミリーや村の人々の温かさです。

ホストファミリーは、初めて会ったときから手を繋いでくれ「あなたは私たちの家族だ」と言ってくれて、すごく温かい嬉しい気持ちになりました。ホームステイをしている間、どこか出かけるときも、親戚のお家にお邪魔するときも、ご飯を食べるために移動するときも、アンマー（お母さん）か妹のウシミラが手を繋いでいてくれました。

村の人々は、自分のホストファミリーでなくても、気遣ってくれたり、知らない人でも、目が合ったら必ずニコッと微笑んでくれます。これは当たり前に思えますが、日本やほかの先進国ではなかなかないことなのではないかなと私は思います。私は、違う国から来た人でどんな人かもわからないのに、微笑んでくれたことが嬉しくて必ず微笑み返しました。微笑んでくれた人の顔を覚えているくらい大切な思い出です。

私はスリランカでの青年海外協力隊の活動視察やJICA スリランカ事務所訪問で、自分が知りたかった青年海外協力隊について詳しく学ぶことができました。また、青年海外協力隊の方々和日本食を食べながらの交流もありました。そのとき、私は保健師の女性の方のお話を聞くことができ、どんな活動を行なっているのか、これまでの活動で、発展途上国をどう思うようになったのかなど、青年海外協力隊の視察の時に質問できなかったことを踏まえて質問することができました。とても勉強になったので、これから先、自分がもし青年海外協力隊になったときに大事な知識として生かしていきたいと思います。

4日間のホームステイ中に、スリランカの学校との交流会がありました。学校に着いた途端、子供たちの楽器を吹きながらのパレードが始まったり、花飾りを首に掛けてくれたり、花束をくれたり、ヤシの実ジュースをいただいたりして、歓迎されてることがよくわかり、すごく嬉しかったです。交流会では、小学

生の子たちと折り紙をしたり、歌を披露したり、逆に、ダンスを披露してもらったりして楽しかったです。私は折り紙作りの担当で、みんなで子供たちに鶴の作り方を教えてあげたり、かぶとや箱などの折り紙をプレゼントしたりしました。子供たちの反応が良くて、もっと日本について教えたい、日本に来てほしいと思いました。可愛い子供たちの笑顔をみて、嬉しい気持ちになりました。

この4日間のホームステイが終わるお別れの日、私は大号泣でした。たった4日間しかホストファミリーと過ごしていないのに、たくさんの温かさを感じ「帰りたくない、もっと一緒にいたい」と思うようになりました。ホストマザーも一緒に泣いていて、ホームステイ中も何度も言われた「また絶対来てね」をまた最後に言われて、すぐ会いに戻れないのが寂しくて仕方ありませんでした。

1週間ほどのスリランカ生活はとても濃い思い出です。スリランカに来て、ホームステイをして青年海外協力隊について学んで、自分の中で得られたものはすごく大きいと思うので、将来の自分が選ぶ道に生かすことができたらいいと思います。今回の国際協力体験事業はとても良い経験になりました。



ホストファミリーとお別れ



学校交流の様子

スリランカで学んだことと今後の課題

国分高等学校 2年 杉田 百花

私がスリランカで最も衝撃的だったことは食生活でした。スリランカへ行く前から少し栄養に偏りがあることは、知識として持っていましたが、実際に体験してみると、想像を超えて異常に感じました。朝は甘いお菓子和ミルクティーに始まり、その後もご飯と間食のおやつで私の胃袋は常にいっぱいだったように思います。私たちへの歓迎の気持ちもあって、たくさんの食べ物を用意してくれたのかも知れませんが、どこを訪問しても出てくるお菓子の甘さには苦戦させられました。

同時に、スリランカの人の健康がとても心配になりました。実際に、スリランカ人の体型を見てみると、手足が長くスタイルが良いのにも関わらずお腹だけが出ているという人も少なくありません。また、糖尿病などの生活習慣病の方が多く、心臓・循環器系の病気で亡くなる人が最も多いというお話も伺いました。大きな理由として食生活に関わっていますが「このような事実があっても、ずっと当たり前に続けていた生活を変えること、意識を変えることはなかなか難しい」と保健師の青年海外協力隊の長部さんが仰っていました。難しいからこそ、文化の違う異国の地で健康への意識改革に取り組んでいる長部さんは、とてもかっこよく見えました。言語が全く違うため、伝えたいことがなかなかうまく伝わらなくて悔しいこともあると仰っていましたが、ゴミ箱に折り紙を貼って注意を引いたり、絵を書いてわかりやすいようにしたり、伝わらないなりに工夫して「伝えよう」としているのがすごく印象深かったです。長部さんのように、情熱を持って真っ直ぐに目の前の人や環境と向き合うことが、信頼関係が築けて人々の意識を変える一番の近道なのだと気付かされました。

私の将来の夢は、看護師になって青年海外協力隊の一員として活躍することです。今回の派遣事業に参加を決めたのも、夢に向かって高校生の今だからできる貴重な経験であると思ったからです。実際、自分が

思っていたよりも遥かに素晴らしい経験となりました。青年海外協力隊としての仕事、また海外での生活はそんなに甘いものではないということを再確認できましたし、それ相応の努力と覚悟をしなければならないと感じました。でも、青年海外協力隊になって活躍したいという私の夢は、薄れるどころかますます強まりました。保健師の長部さんのように、国境や人種の壁を越えて、人と真っ直ぐに向き合える看護師になりたいと思っています。そのために今の私がすべきことは英語の勉強だと思います。日本でもスリランカでもあらゆる所であらゆる人に言われます。「英語はできた方がいい」「できて損はしない」と。私よりたくさんの経験をしてこられた方々が、口を揃えてそう言うので、今の世の中よっぽど英語が大事なんだと改めて感じました。夢を叶えるためにも、今は必死に英語やその他の勉強を頑張っていこうと思います。



ホストファミリーと一緒に 本人：左



スリランカの保健所の様子